

# 東日本大震災後における復興教育実践に関する考察

—宮城における徳水博志の教育実践を中心に—

佐藤 修 司

## Education Practice for Reconstruction after the Great East Japan Earthquake

-Focusing on the educational practice of TOKUMIZU Hiroshi in Miyagi-

SATOH, Shuji

### Abstract

TOKUMIZU Hiroshi worked as an elementary school teacher in Miyagi Prefecture, who practiced education for reconstruction in 2011 and 2012. Since 2014, he has been working on community development projects at the Ogatsu Rose Factory Garden. In the educational practice for reconstruction, children learned how to live in the community while participating in the activities of the local traditional culture and fishery industry. He also worked on activities to express memories of the earthquake and the past through poetry, haiku, prints, dioramas, etc., in order to care for the physical and mental health of children who were damaged by the disaster. This study elucidates the significance of TOKUMIZU's educational practice and community practice while comparing TOKUMIZU's activities before and after the earthquake, and before and after retirement.

**Key Words:** Great East Japan Earthquake, education for reconstruction, care, community, creative reconstruction

### I はじめに

徳水博志は1953年宮崎県の生まれで、宮城県で小学校教員を長く勤めてきた。震災時は、石巻市立雄勝小学校の教員であった。雄勝小学校は津波により校舎が全壊している。徳水(2018)によれば、亡くなった児童は1名(下校していた児童)、父親を亡くした児童1名、祖父母を亡くした児童5名であり、108名の児童のうち、3名を除いて自宅が全壊。教職員16名中、家族を亡くした者2名、自宅全壊3名であった。

徳水は震災後2011年度、2012年度に復興教育に取り組んだ後、2013年度は病気休暇となり、そのまま2014年3月に定年を迎えた。2012年の夏休み期間中もひと月ほど入院生活を送っており、震災が徳水の心身に与えた影響の大きさを感じさせる。そして、定年後、2014年4月には非営利型の一般社団法人「雄勝花物語」を設立し、現在までその活動に取り組んでいる。

徳水とは震災後以下のように様々な形で出会い、調査等を行ってきた。

- ・2012年6月16日 震災後の被災地の状況に関する聴き取り調査(石巻市役所移転先)
- ・2016年2月23日 石井山(東北大学)の研究会での徳水及び瀬成田の報告への参加(仙台市)

- ・2017年10月7日 秋田大学教職大学院の研修旅行で徳水による大川小・雄勝小跡地ガイド及び防災教育・復興教育プログラム(石巻市雄勝)

- ・2019年10月26日 同上

- ・2020年1月31日 徳水の復興教育及び雄勝花物語の取り組みに関する聴き取り調査(石巻市雄勝)

徳水の復興教育実践については、土屋直人(2022)や石山(2016)の研究があるが、本稿では復興教育やその後の地域での活動、そして、地域と教育との関わりを中心に考察する。

そもそも、教師は地域に根ざしにくい存在とも言える。第一に、多くの小中学校の教師は、身分的には市町村の職員であって、服務監督権が市町村教委にあると言っても、主に各県にある国立大学教員養成学部で養成され、県によって免許が交付され、採用される。免許管理者、任命権者(県費負担教職員)は県であり、人事異動も市町村をまたいで広域に行われている。

第二に、教師の出身は都市部であることが多く、農林漁業を主体とした地域の出身である場合は少ない。地域にとって、教師は異質な存在であり、それ故に、地域の「偏見」や「常識」等に染まっていない「知識人」「有識者」としての立場を取ることも可能である。自家用車通

勤が一般化する前の1960年代頃までは地域に居住することも多かったが、今では多くが自家用車による長距離通勤となっており、その分地域との心理的距離も大きくなっている。

第三に、公務員である教師は、給料が税金から捻出され、人事院勧告を参照しつつ、人事委員会、地方議会によって決定される。児童生徒数が減少し、その結果、学校が統廃合になったとしても、そのことをもって分限免職や給与減額となることは考えられない。学校が存続することについて、教師は真剣な関心を寄せることが難しい存在だと言える。

徳水は雄勝の出身ではないが、妻の実家があり、長く居住し、雄勝と密接に関わりながら教師人生を歩んできた。そのことが彼の復興教育実践につながっていることは明らかである。そのことを踏まえつつ、学校や教師が地域にどのように関わることが望まれるのか、徳水の実践を通じて分析することとする。

## II 雄勝地域の歴史・文化・人口と学校

合併前の雄勝町は宮城県の北東部に位置し、東は太平洋に面し、名振湾、雄勝湾を有していた。2005年4月1日に石巻市、桃生町、河南町、河北町（雄勝町の北隣で、旧大川小学校がある）、北上町、牡鹿町と合併し、新制「石巻市」となった。合併前の2005年3月の雄勝町の人口は4,695人であった。震災前の2010年10月には、3,994人と、すでに大きく減少していた。現在、2022年11月には、雄勝地区は1,075人となっており、震災後の人口の回復はほぼなく、震災直前と比較しても、さらに4分の1程度にまで減少している。ちなみに1960年には11,179人の人口を抱えていた。

徳水（2018）によれば、旧雄勝町では80%の家屋が全壊、低地にあった公共施設と商店街はすべて全壊し、犠牲者は243名で、70名が行方不明となっている（2017年8月現在）。

元々、水産業が盛んで、カツオ漁、マグロ漁、イワシ漁などとその加工、ホタテやカキなどの養殖業も盛んである。雄勝石が有名で、雄勝硯や、天然スレート（東京駅丸の内駅舎の屋根材としても利用）が作られている。雄勝法印神楽や雄勝町伊達の黒船太鼓なども伝統芸能として受け継がれてきた。ただ、水産業の衰退とともに人口減少が進んでいた。

合併前の雄勝町立の学校は、雄勝中学校、大須中学校、雄勝小学校、船越小学校、大須小学校があった。大震災では、低地にあった雄勝小学校、雄勝中学校が大破し、使用できなくなった。4月に雄勝小学校は河北中学校を借用し仮教室を設置、雄勝中学校は石巻北高等学校飯野川校に移転して教育活動を再開している。2013年4月

に雄勝小学校は船越小学校と統合し、石巻北高飯野川校地内の仮設校舎で教育活動を開始した。そして、2017年に雄勝小学校、大須小学校、雄勝中学校、大須中学校の4校が統合し、雄勝小学校と雄勝中学校が小中併設校として開校している。雄勝地区と大須地区のちょうど中間あたりを新たに校地とし、新たな校舎が建てられた。

2012年の聴き取りで、徳水は復興教育の取り組みだけでなく、すでに統廃合問題に触れていた。震災前から統廃合の話はあったが、震災後半年で、石巻の被災した15校で統廃合の話が進んでいた。被災地における教育環境の劣悪さや子どもたちの荒れ、学力低下、教職員のストレス・多忙などが取り残される一方で、石巻市教委が学力向上一辺倒になっていることを批判していた。

2005年の合併によって、旧町村域を超えた統廃合が進めやすくなった。統廃合は地域の合意がなければ進められないが、その地域自体がなくなってしまう。しかし、雄勝地域では住民が石巻市教委と何度も交渉し、この地域に必ず小学校と中学校を残すという確約を、2012年2月に文書で得ていた。

2005年の広域合併は、震災時の市教委の対応の遅れも呼んでいた。市役所が浸水して交通も情報も遮断され、機能停止し、学校の運営指示ができなくなった結果、旧市町村単位の校長会が方針を決めて学校運営にあっていた。

広域合併によって、7自治体があった状態から一つになり、きめ細かい地域、親の動向、要求と行政との間に大きなずれが生じていた。そのため、住民が主体的に動かない限り、市教委は状況がわからない。

徳水の以上の発言からわかるように、雄勝地区、特に徳水が居住する旧雄勝小学校区の住民の地域に対する愛着の深さを推し量ることができる。合併後も、旧町村単位での住民の自治意識の高さが残り続けていると言えるだろう。

## II 雄勝小学校における徳水実践の特性

徳水（2018）によれば、震災後、宮城県教委や石巻市教委は、震災前の教育課程の実施と授業時数の確保を最優先するという指示を出し、学校正常化、旧秩序の復旧に取り組み、学力低下の防止を優先課題としていた。日常を取り戻すことは一定の意味を持つことであるが、抑圧的、管理的、疎外的、排他的、競争的な学校秩序が戻ってくることになれば、復興の阻害要因になることは明らかであろう。

徳水にとって、学校復興とは「目の前の被災児が震災の傷を癒やされ、前を向く力を得て歩み出すこと」であり、「将来への不安を取り除き、希望を持てるように支援し、励ます学校をつくること」であった。そのために

は、震災前の教育課程を新しく編成し直し、つくり変えることが必要であり、これこそが真の学校復興であり、決して旧秩序の学校の復旧ではないと訴えていた。

そこで生まれたのが徳水の復興教育実践である。徳水の定年前の2年間の復興教育実践については本人自身の徳水(2018)にまとめられているため、繰り返す必要はないが、簡略に整理しておく。

#### 【2011年度】

7月:4年生～6年生・第2回おがつ復興市での南中ソーラン

9月～:6年総合「雄勝硯の復興とまちづくりについて考えてみよう」

- ・硯職人との交流・体験、硯による表札作成と被災者へのプレゼント
- ・雄勝地区震災復興まちづくり協議会の復興プラン作成への参加

#### 【2012年度】

5年生総合「雄勝湾のホタテ養殖と漁業の復興を調べよう」

- ・養殖業者との交流・体験、木版画制作
- 5年生2学期:教科(国語・図工)・総合「震災体験を記録しよう」
- ・震災体験の俳句と作文、朗読劇、絵本制作
- ・震災前の町のジオラマ制作、木版画「希望の船」の共同制作

2011年6月に徳水が校長及び教職員に提案した「震災復興教育を中心とした学校運営(経営)の提案」では、基本認識として、

- ①地域あつての学校であり、雄勝地区の復興なくして雄勝小学校の将来的な存続はない。
- ②児童は10年後の地域の復興の主体となるべき、地域の宝であるという児童観へと転換する。
- ③学校の教育活動は住民とのつながりを重視し、地域住民と可能な限り連携しながら教科学習や教科外の活動、総合的な学習などを展開していく。
- ④雄勝中学校、船越小学校との連携を深め、将来的な学校再建に向かって努力する

の4項目が掲げられ、それを実現するための具体的方策として、

- ①支援を受け身で受ける姿勢から転換し、能動的に働きかけ、友達と《つながり》、表現する活動を構築
- ②地域住民と《つながる》活動を構築
- ③子どもが地域と《つながり》、地域復興の主体となる教育活動を構築

の3点が挙げられていた。各教科、道徳、特別活動、総合的な学習で、①～③の具体的方針を教科横断的に取り入れ、復興教育のカリキュラムに組み替えていくのであ

る。

徳水によれば、地域復興の教材は自分の現在と将来の暮らしに直接関わり、子どもにとって当事者性の高いテーマであり、学ぶ動機付けが明確になり、学ぶことと生きることを結合できる。地域復興に命をかける大人は子どもたちが震災を乗り越えるための自己形成の一つのモデル(復興の知恵や思想を学ぶモデル)となり、子どもの中に前を向く力や希望を作り出すことができる。学力形成と地域復興が結びつき、地域の未来を自分たちの力でたくましく切り開く確かな学力、すなわち、「故郷を愛し、故郷を復興する社会参加の学力」の育成が目指されていた。

2年目の実践は、「ケア的教育実践」であるとされ、そこでは、

- ①子どもが抱える苦悩や喪失感情を整理して表現する学び(対象化)
- ②震災を人生の一部として引き受けて自分の震災体験の意味を問う学び(意味づけ)
- ③震災をただの不幸なマイナス体験にせず、人生の「物語」を新しく描き直し、プラスに転化するような学び(関係性の再構築)

という《震災体験の対象化》、《意味づける学び》が復興教育に付加される。

2年目になって、学級が荒れ、子どもが荒れる状態にとまどい、徳水は自信を喪失する。子どもの学びの要求に応える教科指導と生活指導を行えば子どもは必ず変わるという自信が碎かれる。教科指導、授業で子どもが変わっていく様、子どもが学びの世界に熱中し、学び合い、真理や真実を探求して新しい世界を獲得するという《教えと学びの応答の関係》を作れないことにとまどう。そこで到達したものがケア的教育実践であった。

ケア的教育実践とは、子どもたちが内面に抱く苦悩、喪失感情そのものを教材化すること、子どもに寄り添って、心の不安や叫びを聞き取り、受け止め、表現させ、そして前を向く力を育てることであるとされる。

このようにして、徳水の復興教育構想は、①自分の被災体験を対象化し、表現する実践(心のケア)、②地域復興を学び、復興に参加する実践、③身近な家族とつながり直す実践、④学級集団とつながり直す実践、⑤震災遺児のセーフティネットを学ぶ実践、の5点にまとめられ、「完成」することとなる。

徳水は復興教育における価値観の転換を、①《子どもは地域の宝》という子ども観への転換、②《社会参加の学力》という学力観への転換、③地域復興と一体化した「学校経営」観への転換、の三つに整理している。復興教育は、ただの技術・方法面の転換ではなく、教育観にとどまらない、人生観、人間観、世界観、社会観も含め

た総体的な価値観の転換を必要とするものであった。

その復興教育は主権者教育にも通じるものであり、「地域の意思決定に参加し、憲法の個人の幸福追求権と公共の福祉を尊重し、地域課題を適切に解決したり判断したりする学力」につながるのである。これによって、主体的、対話的、深い学びに加えて、真理を探究する学び、さらに、批判的な学びを実現するものとなる。

また、徳水は、学力向上一辺倒の授業と、復興教育の授業との違いとして、当事者性の獲得と、学ぶ意味の違いを挙げる。問題解決のプロセスで学び方を身につけるとともに、生きることと学ぶことが一致するため、真に生きて働く学力を獲得することができる。内面に抱えるつらさや喪失感情と向き合う学び、泣きながらも震災の記憶と向き合い、整理していく学びが展開される。さらに震災で壊された故郷を慈しみ、この故郷を再び作り直していくために何をなすべきかを考え、実際に行動する学びを提案していた。

### III 徳水の過去の教育実践との対比

徳水は、同じ旧雄勝町内にある船越小学校に勤務している折り、総合学習に取り組み、書物を出している。徳水(2004)で紹介・検討されている実践は、

- 総合学習『体験！帆立貝の養殖』4年生
  - 総合学習『船越学区の帆立貝養殖について探ろう』5年生
  - 総合学習『森・川・海のつながりを探ろう』5年生
  - 『創作劇・森は海の恋人』
  - 共同木版画「森・川・海のつながり」、太鼓演奏の木版画制作
  - 日本海水学会地方講演会での子どもたちの実践発表
- であり、この他に、6年生では、『船越の環境問題を探ろう』『地球の環境問題を調べよう』がテーマとなっていた。

徳水が当時勤務していた船越小学校では、2000年から本格的に総合学習に取り組み始め、故郷の現状と将来を考える力を育てる「ふるさと教育」と、人間と自然との共生の思想を育て、地域に立脚しながら地球的・全人類的环境問題を考える「環境教育」に取り組んでいた。

一見してわかるように、徳水の復興教育実践は、震災を契機として突然誕生したわけではなく、震災前から続く、徳水自身の教育実践とつながっているものであった。

文芸研(文芸教育研究協議会)に所属する徳水(2004)は、文芸研の目指す教育目的を「自己と自己をとりまく世界をよりよい方向へ変革する主体を育てる」ことととらえている。子どもの認識(すべき)対象は「人間と人間をとりまく世界のすべてのものごと、ことば、自然、人間、社会、歴史など」であり、その対象の「本質、法

則、真実、真理、価値、意味」そして、人間にとっての「ものごとの価値、意味」を「認識の内容」として子どもにつかませようとする。

認識の方法として、比較、順序、理由・根拠・原因、類別、条件・仮定・予想、構造・関係・機能・還元、選択・変換、仮説・模式、関連・相関・類推、という九つを使いながら、「ものごとの本質、法則…意味」を認識する力を獲得していく。各教科を教科横断的に関連づけ、総合することで、各教科で獲得した「認識の内容(知識)」を子どもの人格の中で相互に関連づけて統一すれば、「のぞましい人間観・世界観」を育てることができるのである。

また、教科学習によって「認識の方法」を学ばせながら、それぞれの教科で教科独自の「認識の内容」を獲得させ、基礎・基本的な学力を育成し、それを土台として総合学習を築き上げることが目指される。総合学習では多様な要素が複雑に絡み合った生の現実をまるごと扱う。子どもたちは教科学習で学んだ「認識の方法」をさまざまに組み合わせながら使い、複雑に絡み合った生の現実を解きほぐして問いを解決することができる。教科学習と総合学習で認識した「ものごとの本質、法則、真実、真理、価値、意味」をトータルに意味づけることによって、生きることと学ぶことを統一し、「のぞましい人間観・世界観」を獲得することができる。「認識の方法」は「科学と教育の結合」だけではなく、「生活と教育の結合」も実現することができる。

徳水は文芸研だけでなく、新しい絵の会や日本子どもの版画研究会、日本生活教育連盟、みやぎ教育文化研究センターなど、民間教育研究運動に長く中心的に関わってきている。また、教職員組合運動にも積極的に関わっており、そのような批判精神、科学的、実践的姿勢、人間・社会関係(資本)、リーダーシップなどが復興教育実践の背景・基盤にあることも明らかである。

### IV 震災による関係性の喪失の影響

徳水の震災前と震災後の実践を分かちものを挙げるとすれば、それは「喪失感」であろう。徳水の復興教育実践は「喪失感」から始まっている。震災、津波による地域の人々、人間・社会関係、建物、風景の喪失感はもちろん、加えて、家族の一員を失った喪失感、学校が津波で流され日常の学校生活・教育実践を失った喪失感、子どもたちの日常が失われた喪失感、これまでの実践記録を失い、定年後の未来の計画を失った喪失感などもあるが、地域が失われたことの喪失感が大きかった。

当たり前存在した空気のような地域の存在がいかに自分にとって大きいものであったのかが、失われて初めて実感されたのである。その契機は、①裏山への避難を

呼びかけた保護者と、学校及び教師の認識のずれ、②震災後に保護者との連絡が不足し、学校への不信や転校を招いたこと、にもあった。加えて、③震災前から進行していた少子化の波が一挙に進み、地域がなくなり、学校もなくなっていく状況に直面したことが大きかった。

徳水の震災前からの実践も、地域に支えられていたことを本当の意味で実感させられたのではないだろうか。徳水（2004）の実践は雄勝の地域に支えられたものであり、雄勝の地域がなければ成り立たないものであった。徳水自身も、震災前までは、地域を「利用」する感覚であったのかもしれない。

徳水（2018）自身、震災後に学校と地域との関係が逆転したと表現している。1970年代以降、地域が失われる中で、地域に根ざした学校づくりが盛んに叫ばれていた。「村を捨てる学力」ではなく、「村を育てる学力」の形成が目指されていたはずである。文科省が唱える地域に根ざした、地域とともにある教育は、地域を利用してだけでなく、地域を衰退させる役割は一層強化されていく。学校のための地域ではなく、地域のための学校でなければならない。

徳水は、震災を契機にして地域の重要性に気付き、失われたものが関係性の喪失であることに気付く。第一回おがつ復興市、漁師の合同会社の立ち上げの会議、まちづくり協議会に参加し、被災者支援に参加して、支援される側から支援する側へ転換することで主体性を取り戻し、回復する。その過程で、自分が気付いたことを、子どもたちに返す形で復興教育実践が誕生する。

徳水（2018）は、復興教育の方針を、「震災で切れた《つながり》を再びつながり直すこと」、《人とつながり希望を紡ぐ》ことととらえている。地域、家族、コミュニティ、学級集団、友達など、「つながり」の再構築により、喪失感情が癒やされ、希望が生まれてくる。地域の復興活動に参加することで、前を向く力と希望を生み出し、「地域を学び、復興に参加する活動」を教育活動の中核に据えて、「教育課程」の教育内容を組み替えて自主編成するという復興教育を実践していた。

徳水の過去の実践に加えられた大きなものとして、「ケア」の視点も挙げられる。支援される側から支援する側へ転換することで、客体性から抜けだし、主体性を取り戻す。無力さ、絶望ではなく、自分の人生を自ら作り出す意欲と自信を作り出す。その過程で自己肯定感、自己効力感、自己有用感が高まっていった。さらに、子どもたちの姿が地域の大人たちの癒やしとなり、前を向く勇気を作り出していった。

また、子どもたちは、地域で復興に向けて頑張る大人をロールモデルとして学ぶことで、地域で生きることの

大変さとともに、生きる知恵と勇気を獲得することができていた。

子どもたちにとって失われた地域を、失われた記憶を取り戻し、再構成すること、恐怖体験を慎重に客観化、可視化することで整理し、乗り越える。

子どもにとってふるさは自分を育ててくれたゆりかごであり、記憶の中に堆積して自分の人格の一部を作っている。その記憶とは地域との《関係性》の記憶であり、地域がなくなったことで、地域との《関係性》もなくなったように感じるが、記憶は奥底に眠っている。それを呼び覚まそうとしたわけである。自分と地域の《関係性》を再構築するその行為によって自分自身が癒やされていく。徳水は以上のように自分の意図を説明しており、その過程をケア的教育実践で実現したのである。

## V 退職後の雄勝花物語の活動

退職後の活動の中心となる雄勝ローズファクトリーガーデンは、震災の津波で亡くなった徳水の妻の母親、叔母、従弟の弔いのため、2011年8月に妻が実家跡地に花を植え始めたことが始まりであった。9月、千葉大学園芸学部の教員・学生との出会いを皮切りに様々な支援を受けながら花畑づくりが広がっていく。NHK等の番組でも取り上げられ全国的に広く知られるようになった。2014年に誕生したNPO法人「雄勝花物語」の方針は、被災地を儲けの対象とすることなく、目的を同じくする行政や各団体と連携しながら、住民主体の雄勝町の復興と持続可能な新しい町づくりを目指すことであった。

雄勝ローズファクトリーガーデンのHP (<http://ogatsu-flowerstory.com/about> 2022年12月16日閲覧)や、徳水（2019a）、徳水（2020）、徳水（2021）の中では、以下の目的が掲げられている。

- ①被災地の緑化支援と被災者の支援活動を行う。【支援部門】
- ②被災地教育旅行や企業研修を行う団体、個人に植栽や除草等のボランティア活動の場を提供する。【教育部門】
- ③語り部・防災教育の他に、自然体験学習、森林をテーマにした環境教育、ESD（持続可能な開発のための教育）を実施して交流人口を増やすとともに、子どもや青年を復興の後継者に育てる。【教育部門】
- ④体験教室・セミナー、花・ハーブ栽培、果樹栽培、ジャム・ワイン製造の事業による新規雇用の創出で雄勝町の復興を後押しするとともに、雄勝町内に利益が落ちる「地域内経済循環」を構築する。【事業部門】

徳水の実践は教師としての定年によって終わらなかつた。在職時からまちづくり協議会の一員として、自らが

復興の主体たる大人としての姿を子どもたちに示してきたわけだが、それを雄勝花物語として教育の面を含み込みつつ、生業の復活、雇用の創出という地域の復興・維持にとって核心的な部分に取り組もうとしている。徳水の言によれば、雄勝小学校の子どもたちがまとめ、生活・総合発表会やまちづくり協議会で意見表明した「まちづくりプラン」をそれで終わりにせず、一貫してそのプランの実現に取り組んでいるとのことであった。

雄勝地区震災復興まちづくり協議会の住民運動の成果として、学校再建が決定したものの、残された大きな課題は、「雄勝を近い将来の限界集落から再生し、持続可能な町に復興すること」、「そのためにはなんとしても外部の若者を呼び込むことができる新規事業と持続可能な魅力ある町づくりが必要」なことであった。「若者の就労の場」を造り、「新規雇用を生み出し、外部から雄勝町に定住する人口を増やしていくこと」、そのための取り組みなのである。

また、2018年度に新設される学校については、HPで以下のように触れられている。

**雄勝小中併設校を地域から支え、雄勝の子どもたちが故郷・雄勝を愛し、復興を継承する未来の主権者・主人公として育ててくれること。600年の歴史と伝統文化を継承してきた先祖の意志を引き継ぎ、愛する雄勝を震災から復興させて町を残し、次の世代に引き継ぐこと。震災復興と過疎からの再生という二重の課題を克服し、日本の地域再生のモデルを創ること。これが「雄勝花物語」の復興を、プロジェクトを起こした私達住民の強い願いです。復興活動の目的は持続可能な町づくり、復興手段は新規事業化による雇用創出、そして地域と世界を結びつけるグローバル後継者育成、復興活動は故郷への愛です。**

雄勝花物語では、雄勝の森・川・海のつながりを生かした環境教育の場を提供し、地域復興と一体化した教育活動（ESD）を展開しており、開校する学校の子どもたちに対しては、「地域復興の主人公となってもらうために、地域教材の学習の場を提供し、外から学校教育を支える」予定になっている。「経済的利潤のためのグローバル人材の育成ではなく、世界全体と雄勝地域をつなぐグローバルな発想と行動力をもった、地域復興と持続可能な地域の再生を担う主人公を育てる教育」を目指している。

2017年と2019年に秋田大学教職大学院の研修旅行で、徳水に大川小学校跡地と雄勝小学校跡地をガイドしてもらい、その後、2017年はガーデンの一角の仮設の建物で、2019年には、石巻市・復興まちづくり情報交流館・雄勝館で、「防災教育プログラム－東日本大震災の巨大津波の教訓から学ぶ津波防災教育」「震災学習プ

ログラム－被災児の心のケアの教育実践」を聞いた。これらの徳水氏の取り組みは、ガーデンの活動の一環としてなされている。

その他、2020年の聴き取り調査では、企業の新人研修も実施しているとのことであった。まちづくりに参加してもらい、ガーデンとその周囲の緑化の作業にも参加してもらっている。そして、参加する社員たちに対して徳水は、企業が社会的・世界的責任を自覚して、自社の利益を社会全体の利益につながるような会社にしなないと、会社の未来はないということ、その観点から、自分と会社との関係を考え、自分の生きがいを考えることを伝えている。営利企業も本業を通じて、社会的問題解決、共通価値の創造に取り組むことが求められる。徳水の会社自身も、地域課題を自社の利益とするソーシャルビジネスを目指していた。そこにポスト資本主義のあり方を見いだそうともしていた。

雄勝地区では企業誘致型の復興計画が破綻した結果、復興庁も注目し、雄勝ガーデンパーク構想が、低平地利活用モデルとして支援を受け、石巻市も2017年に方針転換して、正式に取り組まれることになった。住民の要望に添ったボトムアップ型の復興案が採用された。この構想は、まさに雄勝小学校の子どもたちが考えていたことであった。

徳水氏が「地域に根ざす教育」と「地域を育てる教育」に加えて、持続可能な経済に支えられ、つながりと希望が紡がれる地域を構築しようとしていること、学校づくり、「人づくり」を組み込んで地域づくりに、定年後もライフワークとして取り組んでいることに驚かされる。

## VI 雄勝小・中学校と徳水との関わり

2020年1月31日に校舎一体型小中併設校である雄勝小学校・中学校を訪問し、横江良伸校長に聴き取り調査を行った。開校3年目で、横江校長は着任1年目であった。自身が雄勝の出身で、学校から歩ける距離に居住し、震災も当地で経験していた。それ故、地元の思い、教員としての思い、市や県、国などの考えをもとに何とかこの雄勝のために取り組みたいとの思いを語っていた。

震災前、地区の小中学校5校で243名いた子どもたちは訪問時32名となっていた。雄勝小学校単体で震災時108名いた児童は、2011年4月に学校を再開していた時点ですでに41名に激減し、2015年には19名となっていたが、現在は小中4校を統合しても震災時の数にも達しない状況にある。高台移転の遅れなどもあり、人口流出は深刻で、2020年の調査時においては2021年度の小1は5名、2022年度は2、3名程度と予想されていた。

子どもたちの中には1時間くらいかけて通っているものもいる。震災後はスクールタクシーもあったが予算が

続くわけではなく、今は学区内のみのスクールバスになり、学区外からの子どもが住民用のバスで通っている。住民用バスだと、学校の教育活動に合わせた運用ができないため、部活などでは、保護者が迎えに来ている。スクールバスは、バスと言っても、人数が少ないので、タクシーやワゴン車が利用されている。この地区は15の浜があって、浜毎に1人か2人の子どもがいる状況で、家に戻っても近くに友達もいない。

学校は1階が小学校、2階が中学校、3階が社会教育施設となっており、災害時の避難場所として機能するようになっている。ただ、台風の際に避難所を開設したが、避難してきた人は3家族13名だけであった。住民が分散して居住しているため、高齢者は車でここまで来られないとのことであった。

開校時の学校づくりのコンセプトは、

- ・地区の復興の象徴となる効果的な学習環境が整備された学校
- ・小規模校の良さを活かした小中連携教育のモデルとなる学校
- ・地域の歴史や文化、自然環境を大切に学校と地域が協力して共に歩んでいく学校
- ・災害から子どもたちと地域住民を守る学校

であった。地域の伝統文化を受け継ぐため、雄勝法印神楽と復興和太鼓が取り組まれていた。また、雄勝の良さに触れるための自然体験活動が盛んに行われ、子どもだけでなく、教職員についても、雄勝の魅力を知るための研修を実施していた。

徳水からの聴き取り調査(2020年の同日に実施)では、横江校長となって初めて雄勝小・中学校で防災教育の講師として依頼を受けたとのことであった。徳水自身は地域づくりのテーマで呼んでほしいと希望してはいても、学校の教員が雄勝のことを知らずに赴任し、遠くから通勤していること、教員の問題意識が地域に向いていないこと、徳水とつながりがある、またつながりを持つとする教員が少ないことが課題であると徳水は感じていた。

徳水の後輩にあたる教員は、徳水が取り組んでいるまちづくりを教材化しようとしているが、子どもたち自身が雄勝に住んでおらず、遠方からスクールバスなどで通ってきていて、雄勝を「地域」と感じていない。すると、教材化して実施しても、子どもたちにとって当事者としての問題意識にならないことが難しさとして存在する。徳水は石巻市で社会教育委員を務めていることから、公民館の事業としては防災教育や地域づくりに関わる話をしているそうだが、逆に学校については積極的に取り組むように言うことが難しいとのことであった。

2012年調査で、徳水は自身の復興教育実践のために

は予算措置や地域コーディネーターとともに、現場の教員が自分たちこそ地域を復興するための教育を作るんだという意識を高める研修が必要だと語っていた。カリキュラムを現場から作っていくというゆとりと発想力を求めている。また、多くの校長は地域の出身者ではなく、他地域から来ており、地域のことを知らないことから、地域の中にもっと入っていくこと、まちづくり協議会などに参加し、地域のことを知ること、地域とのつながりを作ることを求めている。これらは今の時点でも求められることである。

## VII おわりに

徳水の復興教育実践の特徴として以下の5点を挙げる事ができる。第一に、学校・授業づくり、学びづくりと地域づくりの一体性である。学校づくり・授業づくりの中に地域づくりを取り込み、その中で編み出された復興教育実践がまた地域を勇気づけるものとして地域づくりに還元されていた。定年後の活動では地域づくりが主となり、雄勝小学校との連携は薄くなったが、教員研修、企業研修、社会教育の領域で、学びづくり、育ちづくりに関わり続けている。

第二に、復興教育の基盤に、震災以前における教育実践の蓄積があったことである。徳水は民間教育研究運動の担い手として、ショーンや佐藤学が言うところの「省察的实践者」として、「行為の中の省察」、「理論と実践の往還」を実践していた。さらに、雄勝の地域を素材とした教育実践を展開し、ふるさと教育、環境教育に取り組んできていた。

第三に、震災・津波による、地域の関係性の喪失が子ども観、学校観などの価値観の転換を生じさせ、復興教育を誕生させたことである。ある意味では、震災前の優れた実践の中に幾ばくか残り続けていた学校中心、教育中心、教師中心の価値観が、地域の喪失という現実の前に主客の転倒を起こし、純粋な意味での子ども中心、人間中心、地域中心の価値観に転換したということであろう。そして、関係性の再構築が、教育課程においても、子どもの心身のケアにおいても重要な役割を果たすことになった。

第四に、空間的に学校や教室にとどまらず地域に広がり、時間的に定年で終わらず生涯をかけて地域づくり、学びづくりに取り組もうとする、徳水の教師としての生き様である。持病を抱えながらも、あくなき挑戦を続ける姿勢は、すべての教師が持てるものではないが、学ぶところは多いはずである。

第五に、学校、そして地域を取り巻く国際的、全国的、社会的、経済的、政治的な構造を捉えた実践だということである。創造的復興という名のもとに展開される惨事

便乗型資本主義，国主導，大資本中心のインフラ中心の復興に対して，人間中心の復興，なりわい・生活の復興，自然との共存・共生を前提とした復興が対置される。岡田知弘（京都大学）に学びながら「地域内経済循環」を目指していることも特筆される。

徳水の構想が容易に実現できるものでないことは，現在の雄勝小中学校の状況からも明らかであり，雄勝花物語の活動が若者を雄勝に呼び戻し，人口を増加に転じさせることも簡単ではない。徳水の取り組みを点から線へ，面へと広げ，様々な取り組みが多様に展開されることがなければならない。そのためには，教育行政，行政全般の転換，また県・国などの広域的な範囲での転換が求められるところである。

もう一つ付言するとすれば，徳水の復興教育は東日本大震災・津波という未曾有の災害によって生じたものであったが，被災地に限定されない，危機管理・復興に限定されない普遍的な意義を持っていることである。2020年聴き取り調査の折，徳水は，「防災は日常の生き方そのものの延長線上にあるんです。日頃から授業の中でどれだけ鍛えるかです。失敗の授業をたくさん経験することです。思い通りにならない授業をたくさん積んで，子どもの言うことを，子どもの思いを大事にする授業は何か，絶えず考えて，積み重ねていくと判断力がだんだんと研ぎ澄まされていきます。子どもの思い，命を優先にした授業をどう作るかということが防災につながると思います。」と述べていた。

震災に限らずとも，日常は突然に非日常へと転換する。日常と非日常の区別はあいまいで，常に併存していると考えられるべきである。非日常を忌避したり，閑却したりすることは論外として（とはいえ容易に風化する），想定を増やし，備えをすることも重要であるが，日常そのものを見直すことがより重要であろう。非日常を経験した以上は，それまでの日常は同じものではなく，違って見えなければならない。非日常の次に来る日常は，同じように見えて，異質な存在である。日常に対する人の姿勢が本質的に変わらなければ，また同じ非日常を繰り返すことになってしまう。徳水の発言から思うことは，常に基本に立ち返ることの重要性であり，それに気付かされる場面が非日常の中に現れるということである。人間とは，権利とは，生きるとは，学ぶとは，子どもとは，教

育とは何なのかといった問いに真摯に向き合い続けることが求められるのであろう。

### 謝辞

本稿の執筆にあたりご協力頂いた徳水氏，関係者の皆様に深く感謝申し上げます。本研究は，日本学術振興会科学研究費補助金「大震災を契機とした地域・学校の復興・再生と人口減少社会への対応に関する研究」（平成30～令和4年度）の成果です。

### 引用・参考文献

- 石山雄貴（2016）「被災地における環境教育と教師の役割ー被災した教師の喪失体験に基づく復興の取り組みに着目してー」『環境教育』（日本環境教育学会編）26巻1号
- 岡田知弘（2012）『震災からの地域再生ー人間の復興か惨事便乗型「構造改革」か』新日本出版社
- 佐藤修司（2021）「東日本大震災被災地への研修旅行の教育的な意義と効果」『秋田大学教育文化学部教師力高度化プロジェクト研究集録』7号
- 佐藤広美（2019）『災禍に向きあう教育ー悲しみのなかで人は成熟する』新日本出版社
- 大門正克・岡田知弘他（2013）『「生存」の東北史：歴史から問う3・11』大月書店
- 土屋直人（2022）「津波被災直後における徳水博志の『復興教育』実践と地域づくり：雄勝小学校6年生『震災復興まちづくりプラン』実践を中心に」『社会科教育研究』（日本社会科教育学会編）146号37-48
- 徳水博志（2002）「私の教育実践 ものの見方・考え方で認識の力を育てるー『森・川・海と人をつなぐ環境教育』の実践から」『人間と教育』（民主教育研究所編，第35号）
- 徳水博志（2004）『森・川・海と人をつなぐ環境教育』明治図書
- 徳水博志（2018）『震災と向き合う子どもたち』新日本出版社
- 徳水博志（2019a）「低平地の利活用を進める官民連携事業：石巻市の雄勝花物語の挑戦」『住民と自治』（自治体問題研究所編）671号
- 徳水博志（2019b）「大川小事故の教訓を生かした防災教育」『人間と教育』（民主教育研究所編）104号
- 徳水博志（2021）『復興教育』の具現化を目指す雄勝花物語の挑戦』『歴史地理教育増刊：あの日から10年 東日本大震災から未来をひらく』（歴史教育者協議会編）922号
- 徳水博志・佐藤敏郎・阿部正人・石井山竜平（2020）「オンライン・シンポジウム 地域再生と社会教育：震災復興に向き合い続ける学校関係者の経験と省察に学ぶ」『月刊社会教育』64巻9号，9月